

PLAZA WEEK 2009
GUIDEBOOK

URRP

PLAZA WEEK 2009 編集委員会 編

Plaza Week 2009 Editorial Committee, edited,

このレポートのもととなっている PlazaWeek 用に配布した冊子は、本冊子末尾に縮小して掲載しています。これは当日紙媒体でのみ配布しました。必要な方は、office at [ur-plaza.osaka-cu.ac.jp](mailto:office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp) か、jeon at [ur-plaza.osaka-cu.ac.jp](mailto:jeon@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp) まで連絡ください。

PLAZAWEEK'09

Schedule

2010.1.14 キックオフミーティング @高原記念館

2010.1.18 現場プラザフィールドワーク
～1.21

1/18 日本橋～龍王宮～天神橋

◇大阪の歴史文化遺産・都市の周縁性 (p3～14)

1/19 阿波座～西成

◇起業と企業 (p15～28)

1/20 豊崎～阿倍野

◇「大大阪」時代の庶民の住宅地 (p29～40)

1/21 カマメ～船場～大淀

◇アートと社会包摂 (p41～50)

2010.1.22 ワークショップ @高原記念館

2009 年度都市研究プラザ PLAZAWEEK

2009 Urban Research Plaza

PLAZAWEEK 2009 REPORT

2010 年 1 月

- 1月14日（木）17時～（高原1階）
：キックオフ・ミーティング
- 1月18日（担当教員：塚田、全）
：日本橋－龍王宮－天神橋（key-word:大阪の歴史文化遺産・都市の周縁性）
- 1月19日（担当教員：水内）
：扇町－西成（keyword:企業・起業）
- 1月20日（担当教員：佐藤、（藤田））
：豊崎－阿倍野（keyword:生活文化・包摂）
- 1月21日（担当教員：中川、櫻田）
：カマメ－船場－大淀（keyword:アートと社会包摂）
- 1月22日（担当教員：堀口）@高原・ワークショップ

大阪市立大学都市研究プラザ
全泓奎、本岡拓哉、辻堅太郎、佐藤由美、櫻田和也、堀口朋亨編

Osaka City University Urban Research Plaza
Hong Gyu JEON, Takuya MOTOOKA, Kentaro TSUJI, Yumi SATO, Kazuya SAKURADA,
and Tomonaga Horiguchi edited

※ このレポートのもととなっている PlazaWeek 用に配布した冊子は、本冊子末尾に縮小して掲載しています。これは当日紙媒体でのみ配布しました。必要な方は、office at ur-plaza.osaka-cu.ac.jp か、jeon at ur-plaza.osaka-cu.ac.jp まで連絡ください。

2009 年度・都市研究プラザ・Plazaweek の企画に寄せて

2009 PLAZAWEEK 総括企画担当
大阪市立大学都市研究プラザ准教授
全泓奎

都市研究プラザは 2007 年より『文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築』というテーマでグローバル COE 拠点に選定されました。今年は事業開始後 4 年目となり、昨年は中間評価を受けました。近年経済社会情勢が厳しく貧困や排除問題が各地から報告される中、昨年末の事業仕分けにより今年度の予算は明るい見通しが持てません。その一方、我々の研究活動への社会からの期待は高まるばかりです。そこで、今年度のプラザウィークのテーマもそれにならって「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」にしました。しかし、例年のプラザウィークとは異なる点がいくつかあります。まず、例年行ってきたポスターセッションを行わないことにしました。それは、プラザウィークを個々人の研究成果を個別的に発表する場、とするより、みな成果を現場プラザをベースに共有していくような「プロセス」を重視したいと思ったからです。ここでは、なるべく各プログラムに積極的に参加してもらいユニット横断的な研究交流活動の「アクション・リサーチ」を「ドキュメンテーション」することを目指しています。

具体的には、現場プラザを使いながら、午後はスタディツアー、夜は現場プラザでの催し（座学・文化祭・交流会）を行います。最後の日は、立ち位置（高原、各現場プラザの拠点）に戻り全日程の総和をパネルディスカッションという形で行います。この方法は、来る 12 月に開催予定の国際シンポジウムでも援用することを想定しておりそれに向けた実験的な取り組みとしての位置づけもあります。

プラザウィーク 1月18日 「大坂/大阪の歴史文化遺産と都市の周縁性」

プラザウィーク第1日目企画「大坂/大阪の歴史文化遺産と都市の周縁性」は、フィールドワーク①②、そして座学の3部構成で行われた。本企画には、都市研究プラザ外部からの参加者を含め、約40名の参加があった。

まず、フィールドワーク①では、まず第1ユニットの特別研究員の山下聡一氏から、大阪市天王寺区にある生國魂神社の案内が行われた。地図や絵図を参考に、生國魂神社の歴史的背景や主に近世期の状況についての報告が行われた。次に、第1ユニット特別研究員の藤井正太氏と大阪歴史博物館学芸員の八木滋氏の案内で、旧長町そして千日前周辺の案内が行われた。近世から近代初期にかけての都市周縁部である両地区の歴史的痕跡を辿った“まちあるき”は、多くの参加者の関心を喚起したと思われる。

フィールドワーク②では、桜ノ宮龍王宮および長柄周辺を歩きながらの案内となった。まず済州島出身者の祈りの場とされる龍王宮では、会場の隣で実際にクツといわれる儀礼が行われるなか、第3ユニット特別研究員の本岡拓哉、宮下良子の両氏から龍王宮の状況及び歴史的背景についての説明がなされた。そして、第3ユニットの水内俊雄先生による長柄周辺の歴史的背景の説明を聞きながら、龍王宮から座学の会場である大淀プラザまで移動した。長柄周辺の状況を、周縁という観点からなされた水内先生の案内は、フィールドワーク①での訪問箇所との対比が念頭に置かれ、より一層、地区の状況を深く知るきっかけを提示するものであった。

大淀プラザで行われた座学では、近代における長柄・本庄地区の方面委員制度についてのジョン・ポーター氏による報告が行われた。本報告に対して、水内先生からは、長柄・本庄という対象地区の選定、および社会的排除のみに頼ることないポーター氏の視点について、近代都市史研究に新たな知見が加えられる可能性があるコメントされた。続いて、第1ユニットの塚田孝先生からは、身分的周縁研究の軌跡というタイトル報告がなされ、近世/近代の社会・政治構造の違いに注目しながら、「周縁」という状況およびそれに対する視点の多面性が提示された。座学の最後には、本企画に参加した都市研究プラザ関係者以外の方々からの本企画に対する感想が述べられ、本企画及び現場プラザの有効性について評価する声も多く寄せられた。そして、全行程後に実施された懇親会には約30人が集まり、その日の内容について参加者それぞれの間で感想が述べられあった。

以上、本企画は、大阪の「歴史文化遺産」および「周縁」というテーマに関心を示す参加者の研究姿勢や研究対象に様々な形で影響を与えることができたかと思われる。

【参考文献】

- 加藤政洋『大阪のスラムと盛り場』（創元社、2002年）
- 佐賀朝『近代大阪の都市社会構造』（日本経済評論社、2007年）
- 塚田孝『近世大坂の非人と身分的周縁』（部落問題研究所、2007年）
- 水内俊雄・加藤政洋・大城直樹『モダン都市の系譜』（ナカニシヤ出版、2008年）

文責：本岡拓哉

プラザウィーク 1月19日 「起業と企業—西区と西成区の先進事例から」

プラザウィーク第2日目企画「起業と企業—西区と西成区の先進事例から」は、西区の都心部と西成区のインナーシティにおいて、それぞれ特色ある起業、社会企業の試みを学ぶものであり、西区阿波座における座学と西成区北西地区におけるフィールドワークの2部構成で行われた。本企画には、都市研究プラザ外部からの参加者を含め、約30名の参加があった。

前半の西区では、今月開設したクリエイティブセンター阿波座(CCA)で第一ユニットのRA岡田智博さんからクリエイティブセンター阿波座の目指す方向性に関する説明と「創造産業における起業と持続を促す都市環境」というテーマでレクチャーが行われた。

質疑では大阪や関西における創造産業の動向や、CCAの今後の可能性などについてやりとりがなされた。レクチャーの後には、阿波座クリエイティブセンターが入居している築45年を経た、大きな窓を利用した開放的でおしゃれなつくりで改装真っ最中の、ACDCビルの見学を行った。

阿波座北公園のみどりの生える、今までの扇町とは異なる都心の雰囲気をお楽しみいただく実地での体験で、創造産業における関心の喚起と理解が深まったものと考えられる。

後半は西成区に移動し、フィールドワークを行った。まず、西成プラザを主管している水内俊雄さんから鶴見橋商店街をはさんだ木造住宅の密集した地区についてご案内いただいた。開発後100年ほどになる耕地整理はされているものの、多くのきわめて狭小な路地が迷路のように入り組む密住状況のなかで、近年の生活保護による中高年単身の人々の居住がどのような環境で行われているのかを、個別のアパートの説明を受けながら見学することができた。鶴見橋商店街の空き店舗を利用した、佐々木敏明さん、田岡秀朋さんからは社会的企業である(株)ナイスの「くらし応援室」を引き続き訪れ、これまでの歩みや「くらしの応援室」、「楽塾」といった具体的な事業についてご紹介いただいた。

そして、西成プラザを基盤として研究や仕事をしている特別研究員の若松司さんからは、長橋小学校の空き教室を活用した、比較的廉価な授業料で新たに靴職人を養成する製靴塾の取組についてご紹介いただいた。参加者からは靴産業の動向や製靴塾を卒業した人はどうなっているかなどについて質問がなされた。海外にも活躍する職人さんも卒業生からは生まれているようであり、靴の西成ブランド化もグローバルに展開できているだけに、もう少し塾生が増えれば元気な西成を創生できるのではないかと期待を抱かせるものであった。

最後に、ブラッセリー兼フランス料理レストランであるピアンに移動した。ピアンも設立した(株)ナイスの富田社長から西成区の現状とそこでの企業の役割についてお話しいただいた後、懇親会を行った。ピアンそのものが、西成区北西地区の食をつうじた街の活性化をもくろんだものであり、懇親会では参加者それぞれが感想と研究テーマについて述べあうとともに、こうした美味しい食を介したコミュニケーションから創造性が生まれることを実感し、テーマである「起業と起業」についても議論が深まったと思われる。

参考文献

「創造産業クラスターの形成過程—新産業創出・育成基盤からの側面から」岡田智博 日本文化政策学会第3回年次研究大会予稿集 pp45-47 2010.01

「勃興する「Y'イノベーション」「クリエイティブシティ」横浜における創造ラスタの生成」岡田智博 日本文化経済学会平成18年度年次研究大会予稿集 2006.06

「西成における生活応援活動—あるいは転がる石のモノローグ」佐々木敏明、部落解放 (592), 225~235, 2008

「大阪市西成区における日本型CANの試み」三島浩一、富田一幸、月刊福祉 90(6), 44~47, 2007/5

文責：辻堅太郎

プラザウィーク 1月 20 日

「豊崎エリアから阿倍野エリアへ 生活文化・包摂」

1. 企画の目的

大阪が「大大阪」と呼ばれた大正末期～昭和初期は、大阪が近代都市としての体裁を整えた時代である。当時の大阪は、経済発展と人口集中が進み、あらゆる都市問題が噴出した時期であった。工場と住宅が密集し、地価や家賃が高騰、住宅の不良化と居住環境の悪化が進んでいった。この時代、助役、市長として、大阪の都市政策の中心にいたのが関一である。関の都市政策は、市域の拡張やそれに伴う都市計画といった基礎的事業を土台に、築港事業、大電買収、高速鉄道（地下鉄）の建設、中央卸売市場の整備等の経済的事業、学制統一や大阪商科大学（現 大阪市立大学）の設立等の文化的事業、さらに上下水道、医療、福祉、市営住宅、不良住宅地区改良等の社会事業を行い、今日の大阪の礎を築いた。

関が都市問題解決のために最も重視したのが都市計画であった。その最終的な目的を「住み心地よき都市」とすると著書¹⁾に記していることはあまり知られていないが、市民の生活と生活環境の改善を最終目標に、都市政策を推進していったのである。

こうした背景のもと、豊崎地区は当時の経済発展（工業化と人口集中）により自然発生的に形成され、阿倍野地区は、「住み心地よき都市」を具現化すべく、わが国初の土地区画整理事業によってつくられた町である。いずれも、住宅地としての性格を持ち続けたまま、今日に至っている。

これらの異なる性格・歴史を持つ2つの町の変遷をたどりつつ、その魅力を歩きながら探り、今日における評価を行うことが本企画のテーマであった。

さらに、その町や住まいの魅力を認識し、体験している新しい居住者の意見を踏まえ、長屋生活等の親密で豊かなコミュニティを特徴とする「大阪居住文化」とそれによる人々の住生活の満足度や町に対する誇りや愛着（広義の社会的包摂）の実像に迫った。時間不足により、都市の再構築を展望までは十分に行えなかったが、現場プラザを活用した新たな「まちづくり活動」の芽を感じた1日であった。

2. 企画内容

まず、1月20日当日、12時前に最寄り駅に集合し、豊崎プラザ（改修工事中の長屋・改修済みの長屋）を見学した。工事中の長屋は床板が撤去された状態にあり、柱・梁・戸境壁等からようやく間取りが判明する程度のスケルトン状態であった。また、改修済みの長屋は、学生が設計や施工に関わり、数々の賞を受賞した専用住宅である。1階にキッチンと一体化した大きなリビングがあり、耐震補強のための木製のリブフレームがインテリアの一部となり、築80年余の住宅とは思えないモダンな空間が生み出されている。2階には和室の続き間が昔のまま残っているが、床の間や家具等は現代風のしつらえが施されている。また、窓の外には、同じく大正末期に建てられた主屋を眺めることができ、長屋前の路地とともに、歴史を感じさせる空間である。

その後、まち歩きの説明と3つのチーム分け（各5～7名/チーム）を行った後、あらかじめ現場プラザスタッフが作成したルートマップに沿ってまち歩きを開始した。

各チームには先導するリーダー（2名）と写真撮影担当を配置し、Aチーム（リーダー：黒木・葛西）は豊崎地区の長屋群と中崎町駅に至る路地を、Bチーム（リーダー：綱本・川口）は主に中崎町の細かい路地を中心に、またCチーム（佐藤・平川）は豊崎地区の長屋や商店街、中崎町の裏長屋の残る路地等を約1時間歩いた。その後、チームごとに阿倍野地区へ向かった。

阿倍野地区では、Aチームは地下鉄御堂筋線昭和町駅を起点に、阪南町界隈に残る特徴ある長屋を結ぶルートを、BチームはJR阪和線南田辺駅を起点に、阿倍野地区より古くからある旧田辺村を歩いた。また、Cチームは阪堺線北畠駅を拠点に、お屋敷街と隣接する長屋地区、王子商店街、阪南団地（旧大阪大学南校）、北畠住宅と異なる顔を持つ地区を歩いた。

16時半、最終地点の阿倍野プラザに集合した各チームは、住吉名物のどら焼きを頬張りながら、

チームごとの発表に向けまち歩きの結果である写真の整理を行った。パソコンの画面を囲み、各人がまち歩きにおいて感じたことを語り合い、写真の選定を行った。

その後、写真をスクリーンに映し出し、チームごとに「歩いて感じたまちの魅力」について発表を行った（内容は後述）。

18時からのワークショップでは、まず、豊崎地区がスプロール開発による住工混合の密集市街地が形成されるまでの変遷や当時の住宅の特徴についての報告（深田）、阿倍野地区の変遷、特に鉄道やバスの整備の変遷についての報告（阿倍野地区歴史家・森本さん）が行われ、参加者との活発なディスカッションが行われた。

また、「住んで感じたまちの魅力」について、自ら古い長屋を改築し、夫婦と猫で住んでいる阿倍野地区在住の建築家（望月さん）から、長屋との出会い、セルフビルドの顛末、現在の住まい方等の実態について報告があった。前の居住者の残したものを住み継ぐことの意義や運命共同体としての長屋居住について、具体的なプレゼンがあり、ほのぼのとした長屋生活を垣間見ることができた。

3. 成果・評価

(1) まちの魅力発見と評価について（ワークショップを通じて）

2つのまちは、その成り立ちが異なることから、多くの相違点を有していた。その代表的な特徴を記す。

①まち並みや景観

計画的に整備され、直線道路による街区が整然と並ぶ阿倍野地区と異なり、豊崎地区では、表通りといえども直線道路ではなく、さらにそれにぶつかる路地は、あぜ道がそのままの形状で連続しているかのような複雑な形態である。このため、見通しの悪い部分が多くあり、まち並みは変化に富んでいる。また、豊崎地区では道路の狭さ等から建物の更新が滞っており、路地奥には老朽化した木造住宅が残っている。しかし、両地区とも、更新が容易な表通りにおいても、手入れの行き届いた昔ながらの外観を保つ建物が点在し、戦前の面影の残る個性的なまち並み（一画）を形成し、大きな魅力となっている。

ただし、豊崎地区では、工場跡地に高層マンションが建ち並び、低層の長屋住宅の上空に突き出すように見え、アンバランスな景観を形成していた。

②土地利用と生活

豊崎地区では、大正・昭和の住宅をコンバージョンして若者が趣味性の高いショップやカフェを開いている。北欧の雑貨やバッグ等を販売する店舗は、木構造をむき出した素朴な作りであったが、店の奥には布製品の加工や製作のための空間があり、かつて、このあたりに多く立地したメリヤス工場のDNAを引き継ぐような家内工業的たくましさが見られた。

一方、阿倍野地区では、昔ながらの商店街にあるサロンで「歌声喫茶」が開かれていたのが印象的であった。ハーモニカの演奏にあわせて、地域のお年寄りたちが楽しそうに合唱をしていた。昔ながらの居住機能（長屋と商店街、路面電車など）とコミュニティが残る「大大阪時代のニュータウン」は、今の高齢者（おそらく第二世代）にとっても住みよさそうに見えた。

③居住者像やその暮らし方

企画スタッフによるプレ調査では、あまり気づかなかった事柄、すなわち居住者像やその暮らし方とまちの関係等がワークショップでは多く採り上げられた。

特に、植木鉢や植栽のはみだし、住宅前面に広げて干されている洗濯物等への関心が高かった。また、駐車していた高級自動車に焦点をあてて、その居住者特性を言及した人、飼い猫と「表出」の関係を述べた人、街角に貼られた政党のポスターを採り上げた人等、「外から見えないもの（人）」を見ようとするコメントは、楽しいものが多く、分析の視点の違いを認識した。

(2) 大阪居住文化による社会的包摂の可能性について

以上のような魅力の発見からもわかるように、2つの異なる歴史をもつまちの今日の姿は大き

く異なっている。しかし、共通することは、まちを自分なりに住みこなそう・使いこなそうとする人の力が顕在・潜在していることであろう。

それを明確に示したのが建築家望月さんの報告であった。阿倍野地区の長屋（もと貸し倉庫）に住みつき、セルフビルドで自らの生活スタイルに合う住まいを獲得しようとする姿勢、長屋ゆえの運命共同体的コミュニティを心地よいものに変えていくパワー等がその最たるものといえよう。大阪居住文化＝「まちに住むこと」は「ゆるやかにつながる暮らし方をする」とのコメントは、世代を超えて、新たなコミュニティの創造と継承を予感させる言葉であった。今日の「住み心地よき都市」は、住み手自らの意思で都市を住みこなすことにあると感じた。

（3）イベントとしての成果

まち歩きには約 20 名、ワークショップには約 25 名が参加した。参加者は第 1～4 ユニットの特別研究員・研究補助スタッフ計 20 人、事務 2 人、教員 3 人（最多時）であった。

最後に、プラザウィークにおける本イベントの成果をあげると、①ユニット横断的な研究交流の実践、②現場プラザの役割の再確認、という点にあるだろう。

専門領域の異なる参加者同士が、ひとつのテーマについて意見交換する機会は今までにそれほど無かったが、同じまちを一緒に歩いても、着眼点やその角度、分析スタイル等が異なっていることは興味深かった。今回は、短時間の試みであったが、異なる分野から成るチームの「まち歩き+ワークショップ」は、研究分野を横断する新たな研修・研究スタイルになりうるものと思われる。

また、現場プラザにおける市民研究家、実践者との交流は、まさに「市民知とのふれあい」を実体験することができたよい機会であった。地元の市民側からも大学研究者の視点で「まちの魅力」を探ることを歓迎する言葉がもらえ、現場プラザを拠点とした新たなまちづくり活動への期待が語られたことは、今回のイベントの成果の一つであると考えられる。

注）本稿における豊崎地区とは中崎町・本庄西の一部を含む界限、阿倍野地区とは昭和町・阪南町界限を指す

4. 参考文献

- 1) 関一『住宅問題と都市計画』1923年、弘文堂書房
- 2) 大阪府西成郡役所『西成郡史』1915年、大阪府西成郡役所
- 3) 大阪都市協会編『大淀区史』1988年、大淀区コミュニティ協会
- 4) 筒井有『中津町史』1939年、中津共勵会
- 5) (財)大阪都市協会大阪市都市住宅史編集委員会編『まちに住まう—大阪都市住宅史』1989、平凡社
- 6) 日本経営史研究所編『阪神電気鉄道百年史』2005、阪神電気鉄道
- 7) CASA BRUTUS No.119, MY HOME 2010.2, マガジンハウス
- 8) 水内俊雄他『モダン都市の系譜—地図から読み解く社会と空間』2008、ナカニシヤ出版
- 9) 川端直正編『阿倍野区史』1956、阿倍野区市域編入三十周年記念事業委員会
- 10) 難波りんご『もうちょっと知っとく？私たちの阿倍野』2000、新風書房
- 11) 上井榊「大大阪新開地風景 C 新阪堺国道沿線街 小役人と学生の街」『大大阪』第 8 巻 10 号、1932（昭和 7）年

5. 企画スタッフ

◆教員 佐藤由美（都市研究プラザ）、藤田忍（生活科学研究科）

◆G-COE 特別研究員・研究補助スタッフ（五十音順）

第 1 ユニット：綱本 琴、深田智恵子

第 3 ユニット：川口夏希、葛西リサ、黒木宏一、平川隆啓

文責：佐藤由美

プラザウィーク 1月 21 日 「アートと社会包摂」

趣旨

「アートと社会包摂」をテーマに、第 3 ユニットと第 2 ユニットの架橋すべく、すでにアート NPO であるココルームとの協働を試みてきた西成プラザ、文化創造ユニットを中心に地域のまちづくり団体等との連携を推進してきた船場プラザ、そして今後さらなる展開を計るための拠点として、元長柄プラザと合流する形で「天神橋アートセンター」というスペースも計画中の大淀プラザ、この現場プラザ 3 ヶ所を地下鉄堺筋線でめぐる企画がたてられた。

内容

はじめにカマメ（カマン！メディアセンター）にて、カマメの企画者である NPO 法人こえとことばとこころの部屋（cocoroom）上田假奈代さんより、フェスティバルゲートでの新世界アーツパークで活動されていた時期から、日雇い労働者の失業やいわゆるホームレスなどの社会的困難をかかえる釜ヶ崎において都市研究プラザとの協働でカマメを企画運営されるにいたるまでの経緯が説明された。つぎにカマメ原田麻以さんからは、この一年間のたちあげからの活動の様子、その過程における思考と実践が報告され、さっそく、社会包摂とアートのひとすじなわではないかない現実と、けっしてみのがすことのできない価値と、そのタフな挑戦に考えさせられた。

つぎに船場アートカフェでは、高岡伸一と嘉名光市から「船場建築祭」「まちのコモンズ」等のとりくみが紹介された。地域社会のなかで大学が働くことの意味、またアートが社会を媒介する作用について映像もまじえて、具体的には建築基準で制度化された公開空地を用いて「ふだんとはちょっとちがう公共空間のあり方」を示した例などが、分かりやすく提示された。カマメとはまったく異なる課題をかかえる地域社会（昼間人口が圧倒的なオフィス街、商業の衰退、町内会の不活性など）ゆえにアプローチは異なれど「方法としてのアート」が、少し前までは考えられなかった横のコミュニケーションをもたらしうるものがあらためて認識された。

まちのコモンズのような取り組みについては、地域から今後も高く期待が寄せられているということであったが、期限付きのプロジェクト型予算で大学が地域社会とかかわったとき、いかに長期的展望をもって継続して行くことができるのかについては今後の課題として問われるところである。

さいごに元銭湯である大淀プラザ（天神橋アートセンター）では、簡単なアーティスト紹介から、この（元）銭湯はこんな使い方もできるというひとつの実験として、音響とダンスによるパフォーマンスが披露された。風呂場の魅力的な残響、やわらかい板場の床、脱衣所のロッカーという銭湯ならではの設備と空間の特徴をとらえたスピーカー配置。ふだん「アート」に親しみのない感覚からすると、ややもすると混乱しそうな参加者たちをもまきこむダンサーの身体表現に、身体も頭もほぐされる時間となった。音響の小島さんとダンスの佐久間さんはディスカッションにも参加され、ごく平易な言葉で、「銭湯」という空間から、「境界線をふみだす」魅力を語られた。これに触発され、とりわけ第 3 ユニットの研究員からもいつになく芸術の本質にかかわる自由な言葉が発せられたのは印象的であった。

評価

各現場プラザ約 20～40 名の参加、のべ約 50 名。いずれの会場においてもユニットを超えた参加者の積極的な交流がもたれた。とりわけ効果的なパフォーマンスの披露された大淀プラザにおいては、北市民館以来、大淀寮、大阪希望館といった大阪市内北部の社会福祉を担ってきた大淀という立地と、また銭湯そのものの空間と歴史とが重なり、男湯と女湯、空っぽの湯船、脱衣所独特の雰囲気のもたらす不思議な開放感とあいまって、都市研究プラザのプロジェクトそのものが「一歩踏み出す」可能性を感じることができた。

地域社会の抱える課題、現代美術「業界」の抱える課題、大学そのものの課題など目の前の困難が尽きることはないが、それをいちど都市空間にもちよってみれば、それぞれに有していたはずの「力」をかけあわせることができるのかもしれない。そのきっかけをもたらす「方法としてのアート」の模索が続けられるべきであろう。

【参考文献】

Malcolm Miles, 2004 "Urban Avant-Gardes: Art, Architecture and Change," Routledge.

高祖岩三郎 酒井隆史 他(編著) 2008 『VOL』 03号 特集「反資本主義／アート」 以文社

岩淵拓郎 原口剛 上田假奈代(編) 2008 『こころのたねとしてー記憶と社会をつなぐアートプロジェクト』 こたね制作委員会 ココルーム文庫

櫻田和也 吉澤弥生 渡邊太, 2008 「大阪市新世界アーツパーク事業にみる文化政策の課題ー文化と公共性の現場」『文化政策研究』 1

佐々木雅幸 水内俊雄(編著) 2009 『創造都市と社会包摂ー文化多様性・市民知・まちづくり』 水曜社

Shin Nakagawa, 2010(forthcoming) 'Socially Inclusive Cultural Policy and Arts-Based Urban Community Regeneration,' "Cities," Elsevier.

文責：櫻田和也

プラザウィーク 1月22日 @高原ワークショップ

プラザウィーク 2009 は、2010年1月22日（金）に実行者の献身的な準備・参加者の熱意ある積極的参加によって非常な盛り上がりの中、最終日を迎えることができた。当日はまず始めに、期間中おおいに活躍した研究員三名が佐々木所長によって表彰された。その後、プラザウィークのドキュメンテーション上映が行われ、参加者は各日程のダイジェストムービーを鑑賞することにより、プラザウィークのプログラムが目指した地平の姿を再認識することができたといえる。つづいて、現場プラザで中心的な活動を行っている研究員によるプレゼンテーションにより論点が惹起され、それを基にして行われたパネルディスカッションで活発な討議が繰り広げられ意識の共有が為された。

16:00～16:15 表彰式（佐々木所長による表彰）

ウィーク期間中、特に活躍した研究員を研究員自身の投票によって選出するという試みが為された。お互いの活動をよく知る研究員達だからこそ、厳密な投票が為されたということが出来よう。結果、ドキュメンテーション作成で大きな貢献をした平川隆啓氏が最多得票を得て、最優秀賞を受賞した。第二位・第三位は、自らのパフォーマンスでアートによる社会包摂のあり方の一つを示唆した福本拓氏・堤圭史郎氏が選ばれた。上記の三名が優秀者に選出されたが、プラザの全ての研究員の地道な活動があったからこそ、ウィークの成功がもたらされたのであり、その点は十分に留意されるべきであろう。

16:15～16:50 ドキュメンテーション上映会

前日の撮影までをも編集して上映するという厳しい作業を行った平川隆啓氏の活躍により、ウィークのドキュメンテーションを上映することが出来た。映像と音楽を巧みに織り交ぜた編集により各日程のプログラムの熱気が高原記念館で再現された。ドキュメンテーションの持つ力が再認識され、それを積極的に行っていくことでプラザの活動にとって大きな武器となるであろう。

17:00～18:20 個別発表

個別発表は、各現場プラザの活動に没頭している余り他の現場プラザの活動をよく知らない研究員達に情報や問題意識の共有をなして貰うことを目的に、各現場プラザで中心的な活動をしている人物によって行われた。

西成プラザでは、蓬萊梨乃氏が発表を行った。発表では蓬萊氏が活動に参加するに至った個人史を紐解きながら、西成地域の現状を紹介した。そこでは、NPOメンバーとしての視点、URP研究員としての視点から鋭い考察がなされ、西成地域の現状と活動自体の課題が提起された。

次に黒木宏一氏が阿倍野プラザの活動を発表した。阿倍野プラザでは、「生と死の質」という概念に焦点を当て活動をおこなっており、その概念に近接するための仕組みとしての「Religion-Cafe」という舞台装置が展開されている。黒木氏によって、人間にとって逃れることが出来ない「生」と「死」に果敢に切り込む重要性が強調された。

三番手は高岡伸一先生が、船場プラザの活動に関して発表した。昼夜での人口流動が激しいという特殊な地域環境に配慮した取り組みが、地域に受け入れられ始められているという成果報告と共に将来的な展望と問題点を指摘した。

続いて深田智恵子氏が豊崎プラザにおける活動の発表を行った。そこでは、「住居」として利用され得るような長屋の再生という課題への取り組み、学生の再生作業への参加の意味など、建物

の単なる再生だけではなく、人と人との繋がりをも再生していく取り組みの重要性が強調された。

最後は堀江尚子氏が大淀プラザの取り組みを紹介した。堀江氏は自身の活動・調査の結果を用い、施設出所者の再入所率を低める為に地域によるアフターケアの重要性を指摘した。

18:30～19:30 パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、北川眞也氏が新たに参加をし、北川氏がこれまでの発表に論評するという形式で議論の口火が切られた。北川氏は、(1)全ての現場プラザの活動には人と人との繋がりという一つの共通項の存在(2)活動は人を“包摂していく”だけではなく“巻き込んで”いると見なされ得る(3)地域の個別活動を地域政策・都市政策の中に如何様に取り込ませているのか?というような重要な指摘を行った。それに対して各発表者が各現場プラザからの視点と個人的見解を述べ、非常に活発な議論へと発展した。また、福本拓氏は、北川氏が呈示した概念である“social involvement”の学問的可能性を力説していた。

19:30～21:00 親睦会

内容の濃いウィークの企画がすべて終了し、学問的興奮が醒め遣らぬ中、研究員同士や教員達が積極的に交流を行った。その席は、日頃、時間や空間の制約の為、接する機会の少ない研究員や教員にとって非常に意味のある場となり、アイディアの交換や親睦を図ることが出来た。

文責：堀口朋亨

2009URP プラザウィークを終えて

2009 プラザウィーク・総括企画担当

全泓奎

1週間に及ぶ2009URP プラザウィークが終了しました。

午後のフィールドワークと夜の座学、そしてそれに続く懇親会を通じた活発な議論の場の設定……。これまでになかった各現場プラザをふんだんに使いこなしながら行ったユニット横断的な交流は、今回のプラザウィークでの最も大きな特徴と言えるのではないのでしょうか。さらに加えると、アウトプットのみを想定せずに、それぞれの研究領域を横断することで生じるシナジーをプロセスに落とししていく、実験の道場としての「プロセス・ドキュメンテーション」という新たな実践的手法論の意義を確認できたことも大きな成果の一つとしてあげられると思います。¹⁾

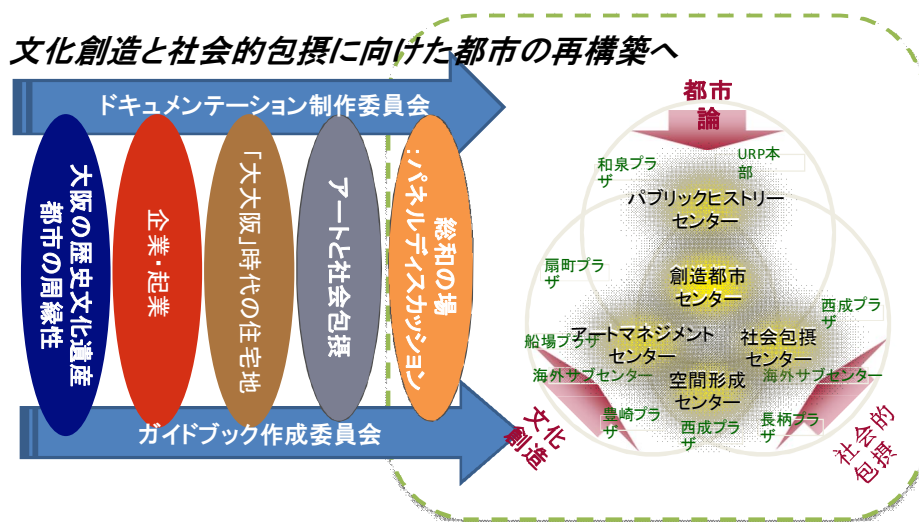
テクノクラートによる目的合理的なプランニングによる弊害への反省から、必ずしも最終的な目的を設定するのではなく、学習しながら自らを変容していく「学習プロセス・アプローチ」(learning process approach)を通してオルタナティブを求める様々な実践の蓄積があり、そこからいわゆる「アクションプランニング」あるいは「マイクロプランニング」が生まれてきました。²⁾つまりトップダウンで決めつけられるブループリント型の社会設計に代わる形で「プロセス・アプローチ」が生まれたのです。

今回のプラザウィークでは、現代都市が抱えている新たな問題（「社会的排除」）に対抗し、このような試みを行うひとつの実験場を設けるという意図もありました。

それぞれのユニットおよびユニット横断的な工夫、交わり、調整のプロセスを経て、各日の企画が出来上がると、それを横につなげるものとして「ガイドブック作成委員会」、「ドキュメンテーション制作委員会」という装置を作り、縦横の連携を図ったことで領域横断的なプロセス・アプローチのドキュメンテーションが可能になったのだと評価しています。

そのような流れをフロー図として表してみたのが下図です。

「文化創造と社会包摂を通じた都市の再構築」に向けた2009 プラザウィークの作動装置



今後はこのようなプロセスの意味を当面のグローバルCOEの残りの期間中にどう活かしていくかということ新たな課題として考えていかなければなりません。

それは、ビデオ・ドキュメンテーションの最後に佐々木先生がお話になったメッセージ（「4つのユニットがあるのですが、それを横断的に融合し、そして新しいテーマがまた生まれてくるように、そういうクリエイティブな研究を是非みんなで作りたいと思うわけです。」）にも通底することと考えています。

14日のキックオフミーティング、そしてプラザウィーク本番の五日間、本当にお疲れ様でした。最終日の22日には3人の方に表彰が与えられましたが、これは3人の方のみが特別に優秀だったという意味ではないと考えます。この方々を選ばれたみなさまもまた真の受賞者であると私は強く信じています。というのは、それぞれの日程を無事に終了することができたのは、各日程に積極的に参加し、発言し、交流していただいたみなさま一人ひとりがいたからだと思うからです。したがって、その軌跡でもあるビデオ・ドキュメンテーションをご参加いただいたみなさまにお渡ししたいと思います。*

*完成作はプラザ事務室および全が保管しています。容量が3Gほどありますので必要な方はDVDを一枚お持ちください。

【注】

- 1) 「プロセス・ドキュメンテーション・リサーチ(PDR)」というアクションリサーチとしての手法も精緻化されている。PDRについては、Mosse, D. et al.(1998)が詳しい。とりわけ、南の国々を対象とした実践例を豊富に紹介している。理論編は、Introductionの第1章と第2章を参照。
- 2) 穂坂は、アクションプランニングについて①速成で選択的に行なわれる診断型「事前調査」、②都市全体を大まかに方向付ける「概念的指針」、③民間を誘導するための公共主要部分での「アクションプログラム」、④実施機関まで含んだ行政各部局間の「役割設定」、⑤実施現場から学ぶことを制度化する「モニタリングとフィードバック」のようなプロセスを持っていると述べている。また、アクションプランニングは、その後、略式計画法(reduced approach)というマクロな手法と、ミクロな方法論である「速成農村調査」(Rapid Rural Appraisal: RRA)、「参加型農村調査」(Participatory Rural Appraisal: PRA)、「参加型学習と行動」(Participatory Learning and Action: PLA)へと展開し、都市のコミュニティ開発ではマイクロプランニングと呼ばれるものが生まれたと述べている(穂坂、1997; 2001)。マイクロプランニングについてのより詳しい実践例は、Goethert and Hamadi(1988)を参照されたい。いずれにしてもテクノクラートによるブループリントで描かれた図面上のまちを押しつけるのではなく、コミュニティや居住者の視点に基づいて当該コミュニティの問題を解決していくことが重んじられており、そこでこそピープルズプロセス、あるいはピープルズプランニングの可能性が読み取れるのである。

【参考文献】

- ・穂坂光彦、1997、「第三世界のオルタナティブーアクションプランニングとセルフビルドの思想一」、『都市計画』(205)
- ・穂坂光彦、2001、「オランギー地区環境整備の都市計画論的考察」、穂坂光彦・篠田隆編、「南アジアの都市環境マネジメント」(文部省科学研究費・特定領域研究(A)「南アジアの構造変動とネットワーク」)
- ・Goethert, R., and N. Hamadi, *Making Microplans: A community based process in programming and development*, London: Intermediate Technology Publications Ltd, 1988.
- ・Mosse, D., J. Farrington and Rew, A.(1998), *Development as Process: Concepts and methods for working with complexity*, London & New York: Routledge.

PlazaWeek2009での配布資料。詳しくは表紙裏を参照のこと。

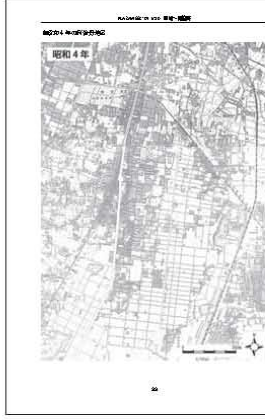
<p>URP URP GCOE Report Series No.65 Jan 2010</p> <p>PLAZAWEEK'09 GUIDEBOOK</p> <p>大阪府立大学 都市研究プラザ Urban Research Plaza, Osaka City University</p>	<p>PLAZAWEEK'09</p>	<p>URP GCOE Report Series No.65 Jan 2010</p> <p>PLAZAWEEK'09 目次</p> <p>1. 大会の趣旨と目的</p> <p>2. 大会の開催日時と会場</p> <p>3. 大会の参加費</p> <p>4. 大会の申し込み</p> <p>5. 大会の受付</p> <p>6. 大会のプログラム</p> <p>7. 大会の連絡先</p>	<p>URP GCOE Report Series No.65 Jan 2010</p> <p>PLAZAWEEK'09 目次</p> <p>1. 大会の趣旨と目的</p> <p>2. 大会の開催日時と会場</p> <p>3. 大会の参加費</p> <p>4. 大会の申し込み</p> <p>5. 大会の受付</p> <p>6. 大会のプログラム</p> <p>7. 大会の連絡先</p>
<p>URP GCOE Report Series No.65 Jan 2010</p> <p>PLAZAWEEK'09 目次</p> <p>1. 大会の趣旨と目的</p> <p>2. 大会の開催日時と会場</p> <p>3. 大会の参加費</p> <p>4. 大会の申し込み</p> <p>5. 大会の受付</p> <p>6. 大会のプログラム</p> <p>7. 大会の連絡先</p>	<p>URP GCOE Report Series No.65 Jan 2010</p> <p>PLAZAWEEK'09 目次</p> <p>1. 大会の趣旨と目的</p> <p>2. 大会の開催日時と会場</p> <p>3. 大会の参加費</p> <p>4. 大会の申し込み</p> <p>5. 大会の受付</p> <p>6. 大会のプログラム</p> <p>7. 大会の連絡先</p>	<p>URP GCOE Report Series No.65 Jan 2010</p> <p>PLAZAWEEK'09 目次</p> <p>1. 大会の趣旨と目的</p> <p>2. 大会の開催日時と会場</p> <p>3. 大会の参加費</p> <p>4. 大会の申し込み</p> <p>5. 大会の受付</p> <p>6. 大会のプログラム</p> <p>7. 大会の連絡先</p>	<p>URP GCOE Report Series No.65 Jan 2010</p> <p>PLAZAWEEK'09 目次</p> <p>1. 大会の趣旨と目的</p> <p>2. 大会の開催日時と会場</p> <p>3. 大会の参加費</p> <p>4. 大会の申し込み</p> <p>5. 大会の受付</p> <p>6. 大会のプログラム</p> <p>7. 大会の連絡先</p>
<p>URP GCOE Report Series No.65 Jan 2010</p> <p>PLAZAWEEK'09 目次</p> <p>1. 大会の趣旨と目的</p> <p>2. 大会の開催日時と会場</p> <p>3. 大会の参加費</p> <p>4. 大会の申し込み</p> <p>5. 大会の受付</p> <p>6. 大会のプログラム</p> <p>7. 大会の連絡先</p>	<p>URP GCOE Report Series No.65 Jan 2010</p> <p>PLAZAWEEK'09 目次</p> <p>1. 大会の趣旨と目的</p> <p>2. 大会の開催日時と会場</p> <p>3. 大会の参加費</p> <p>4. 大会の申し込み</p> <p>5. 大会の受付</p> <p>6. 大会のプログラム</p> <p>7. 大会の連絡先</p>	<p>URP GCOE Report Series No.65 Jan 2010</p> <p>PLAZAWEEK'09 目次</p> <p>1. 大会の趣旨と目的</p> <p>2. 大会の開催日時と会場</p> <p>3. 大会の参加費</p> <p>4. 大会の申し込み</p> <p>5. 大会の受付</p> <p>6. 大会のプログラム</p> <p>7. 大会の連絡先</p>	<p>URP GCOE Report Series No.65 Jan 2010</p> <p>PLAZAWEEK'09 目次</p> <p>1. 大会の趣旨と目的</p> <p>2. 大会の開催日時と会場</p> <p>3. 大会の参加費</p> <p>4. 大会の申し込み</p> <p>5. 大会の受付</p> <p>6. 大会のプログラム</p> <p>7. 大会の連絡先</p>
<p>URP GCOE Report Series No.65 Jan 2010</p> <p>PLAZAWEEK'09 目次</p> <p>1. 大会の趣旨と目的</p> <p>2. 大会の開催日時と会場</p> <p>3. 大会の参加費</p> <p>4. 大会の申し込み</p> <p>5. 大会の受付</p> <p>6. 大会のプログラム</p> <p>7. 大会の連絡先</p>	<p>URP GCOE Report Series No.65 Jan 2010</p> <p>PLAZAWEEK'09 目次</p> <p>1. 大会の趣旨と目的</p> <p>2. 大会の開催日時と会場</p> <p>3. 大会の参加費</p> <p>4. 大会の申し込み</p> <p>5. 大会の受付</p> <p>6. 大会のプログラム</p> <p>7. 大会の連絡先</p>	<p>URP GCOE Report Series No.65 Jan 2010</p> <p>PLAZAWEEK'09 目次</p> <p>1. 大会の趣旨と目的</p> <p>2. 大会の開催日時と会場</p> <p>3. 大会の参加費</p> <p>4. 大会の申し込み</p> <p>5. 大会の受付</p> <p>6. 大会のプログラム</p> <p>7. 大会の連絡先</p>	<p>URP GCOE Report Series No.65 Jan 2010</p> <p>PLAZAWEEK'09 目次</p> <p>1. 大会の趣旨と目的</p> <p>2. 大会の開催日時と会場</p> <p>3. 大会の参加費</p> <p>4. 大会の申し込み</p> <p>5. 大会の受付</p> <p>6. 大会のプログラム</p> <p>7. 大会の連絡先</p>



2. 問題点を示す資料
(1) 問題点の概要について
問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要

問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要

問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要



問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要

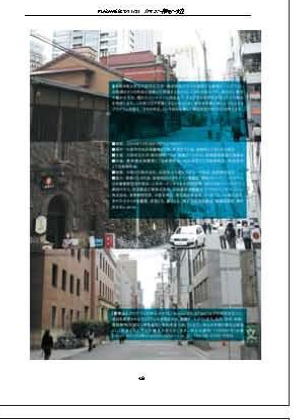
問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要

問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要

問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要



問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要



問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要

問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要



問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要
問題点の概要



PLAZAWEEK' 09

開催日：2010年1月14日、1月18～22日

主催：大阪市立大学都市研究プラザ

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

TEL：06-6605-2071 / FAX：06-6605-2069

URL：<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/>

URP 
Osaka City University

URRP

Urban Research Plaza, Osaka City University,
3-3-138 Sugimoto, Sumiyoshi, Osaka, 558-8585
Japan, office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

大阪市立大学 都市研究プラザ
558-8585大阪市住吉区杉本3-3-138
office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp